

## 国際経済学科生 国際協力、NGO活動に奮闘

### アジア8カ国に“留学” 途上国の開発援助に興味 — 3年次大澤さん

途上国の開発援助に興味を持ち、青年海外協力隊で活動したいとの夢を描いて、狐崎知己教授に教わりたいと国際経済学科に入学した大澤正徳さん。

まず、国際協力にかかわるサークル「S・I・A」を立ち上げ、カンボジアでのスタディーツアーに参加するなどして、「夢」の実現に向け、ネットワークを広げる一方、塾講師のアルバイトや中学校で「世界を五感で体感する」ワークショップを行うなどの体験から、「教育」にも興味を持つようになった。さまざまな活動をしていくなかで、「自分の力で『国際協力』を本当にできるのか」確かめようと、1年間休学して海外に飛び出した。

「自分探しの旅」は、06年5月5日の「こどもの日」からスタート。カンボジア、ベトナム、ラオス、タイ、フィリピン、マレーシア、インド、ネパールを“流れて学び”3月に帰国した。「その国の言葉で話そう」をモットーに、「指差し会話帳」を手に現地に飛び込んだ。子どもたちには「NORI(ノリ)」の愛称で親しまれ、一緒に遊ぶうちに言葉は自然に身についたという。

インドでは幼稚園児から高校生までが学ぶ、ニランジャナ Public Welfare School に1カ月半「体験入学」。これは、2年前、東京・杉並区立和田中学校で行った卒業制作「インドに教材を送ろう」というプロジェクトの“縁”で可能になったもので、大澤さんは恩返しに150人の同級生とその先生方と一緒に「夢描(えが)き教室」を開いた。

カンボジアではスラムで暮らす子どもたちに日本語を教え、「七夕祭り」を開催。社会主義体制から市場経済への移行を推進中のラオスではNGO論や開発経済学を学びながら、水上生活者に医療巡回をする体験も。同時期に飯沼健子国際経済学科准教授が引率していた「海外特別研修」に合流するという「偶然」もあった。

途中で体調を崩したこともあったが、「帰る選択肢があることを忘れないで」と温かく送り出してくれた家族の言葉を励みに続けることができたという。「いろいろな人に出会い多様な価値観に触れ、さまざまな経験をする中で追い込まれたときの醜い自分も含めてすべて『自分』だと納得できるようになりました」と語る一方、自己満足に終わらせないため、「『体験を経験』に落とし込むには、帰国してからが勝負」と、ますますパワフルに活動中だ。和田中で「土曜寺子屋」のボランティアを行い、七夕イベントも企画。

「旅」で見つけた本当にやりたいこと＝「教育の仕事」につくため、復学後、教職課程の履修も始めた。「毎日5時限目まで授業があり、正直キツイです」と笑いながら、「私の体験は、少しの勇気と感謝の心があれば誰にもできること。海外に出ることがいいということではなく、アンテナをはっていれば自分の興味がどこにあるのかは分かってくるものだと思います」と話す大澤さんの次の夢は、2年後の卒業旅行で再び、インドを訪れ、和田中の生徒からの手紙を渡すことだ。



▲“流れて”学んだ貴重な記録の一部より



▲七夕イベントに届いたインドの子どもたちからの夢メッセージ



## 国際経済学科生 国際協力、NGO活動に奮闘

経済学部国際経済学科生を中心に、国際協力やNGO(非政府組織)の活動に積極的に参加する学生が多くなった。ひたむきにパワフルに活動する学生たちを紹介しよう。

### 英国生まれ「オックスファム」 イベントでボランティア — 飯沼ゼミ生

関心事をすぐ行動に

国際経済学科の飯沼健子ゼミの学生ら18人が、国際チャリティー・イベント「オックスファム・トレイルウォーカー・ジャパン」にボランティアとして参加。事前準備や運営にかかわり、600人の参加者をバックアップした。同ゼミの浅川聖さん(4年次)は「国際協力活動をゼミの伝統にしたい」と意欲を燃やす。

英国で誕生したオックスファムは「貧困」問題での開発途上国支援や先進国への政策提言、啓発活動を100カ国以上で展開。世界的に評価され、ノーベル平和賞候補にもなったNGO。

そのオックスファムが主催するトレイルウォーカーは、4人一組が48時間以内に100キロ歩くスポーツイベント。参加者は山歩きに挑む一方、寄付金を集め国際協力に貢献する。5月18日から3日間、小田原市—山中湖村間をコースに日本で初めて開催するにあたり、外国人の参加が6割にも上ることから国際感覚を持つ若いボランティアを募った。

国際機構に知己が多い飯沼准教授からボランティア募集を聞いた浅川さんと山田大輔さん(4年次)は、趣旨に賛同し事前準備に参加。「大会を盛り上げ、国際協力の意識を共有しよう」(浅川さん)とゼミ生に呼びかけた。

メンバーは18日夕、担当となったゴール地点・山中湖畔へ飛んだ。当日深夜には1位チームがゴールする中、設営、選手への給水、計測、誘導、車の整理に駆け回った。

「徹夜の給水作業は大変だったがすばらしい体験」(鈴木皓子さん・2年次)、「また参加したい」(山下恵里香さん・同)、「吹奏楽研究会で老人ホーム慰問を経験したが、国際活動は初めて。今後も身近な地域活動に参加したい」(青柳壮さん・3年次)などNGO活動に目覚めた学生が多い。市民マラソンランナーとして活躍中の山田さん(本紙440号既報)は「選手の立場から“支える”立場を体験できたのは貴重だった」と話す。

同ゼミでは、昨年の鳳祭でHIV/エイズ撲滅キャンペーンを行った。インド式紅茶・チャイを模擬店で販売、注文した人にはコンドームを渡して開発途上国で猛威を振るうHIV/エイズへの関心呼びかけ、話題をまいた。

この運動を主導した竹本美帆さん(4年次)は「オックスファムに参加し、徹夜で選手を待つことでゼミ生の一体感が生まれた。今秋の鳳祭キャンペーン活動の弾みにしたい」と意気込む。

飯沼ゼミのテーマは「グローバル化と発展途上国」。飯沼准教授は「世界的な諸問題を国や地域を越えて学んで分析し、説得力ある意見を養ってほしい。そのためのフレンドリークリティック(友好的批判)精神を」と学生に求め、「今回のゼミ生の活動は、関心事をすぐ行動に結び付け、実にたくましい。オックスファムスタッフの信頼を得て国際協力の運営の一端を知り、波及効果も期待できる。大きなステップアップになったのでは」と話している。



▲給水、案内などに大活躍だった飯沼ゼミの皆さん(山中湖畔で)



▲「オックスファム・トレイルウォーカー・ジャパン」の優勝チーム



▲鳳祭では「HIV/エイズ撲滅キャンペーン」を展開(昨年11月、生田キャンパスで)

